

意識の変化が及ぼす 日本の防衛

水谷 秀志 陸自75

はじめに

人々の意識は時代と共に、どう変化するか、また時代が変わっても変わらない意識はあるのかという問いに答えるため、NHKでは1973年から5年ごとに同じ質問・同じ方法で社会や経済、政治、生活など、人びとの幅広い意識を長期的に「日本人の意識調査」として意識の変化を追跡調査しています。

私たちは、当然に社会や経済、政治、そして普段の生活などについて「昔はこうだった」や「今の若い者は」といった比較をしています。これらの意識の変化という現象は、年齢による加齢要因、世代交代による世代要因及び時代が変わったことによる時代要因などが目に見えない「ゆっくり」とした速さで確実に進んでいます。

調査項目は、日本人の基本的価値、経済・社会・文化、家庭・男女関係、コミュニケーション、政治、国際関

係及び属性などを基本として、更に28項目に細分化して評価しており、その40年間の追跡調査結果には興味深い日本人の意識の変化が見られます。

防衛に関して「国のために戦いますか」という質問に対して出典元であるWIN/Gallup Internationalの調査で「はい」と答えた比率が10%と調査対象79カ国中、最低という結果を発表しています。

「はい」と答えた国は、値の小さな順に日本、スペイン、マカオ、スロバキア、アンドラ、リトアニアなどで第2次世界大戦の敗戦国側か、戦争との関係で複雑な経緯を抱えているという共通点を持っています。

日本の場合は、敗戦国という事情に加えて、日本国憲法が他国の憲法には見ることのできない戦争放棄条項を有しながら、自衛隊という世界第5位の軍隊を保有していることから憲法に対する遵法精神と現実問題からこの間には答えにくいと考えますが、日教組の影響、若者の軟弱、愛国心の欠如などが影響している事実は否めません。

また、日本は、「はい」が一番少ないだけでなく、「わからない」が

38・1%と世界で最も大きい値を示しており、憲法の矛盾は勿論のこと防衛に関する政府の消極的な啓発政策と、そして安全保障や自衛隊についてほとんど教育しないことがマスコミによる一方過ぎる報道最大の原因となっているのは自明の理です。

本投稿では、ロシア、中国、北朝鮮及び不安定国家台頭のなか日本人の意識の変化が及ぼす防衛という試みに挑戦したいと考えて筆を執りました。

1 40年間の意識の変化

(1) 大きく増加した項目

家庭・男女関係では、「夫が家事の手伝いをするのは当然」、「家庭と女性の職業両立」、「女子の教育は大学まで」、「地域の環境に満足」、「婚前交渉は愛情があれば可」、「理想の家庭は家庭内協力」、「政治課題は経済の発展」、「衣食住に満足」など公より理想の家庭や生活の充実へと意識が変化しています。

(2) 変化の小さい項目

変化の小さい項目では、「政治活動の在り方の静観」、「生活全体はやや満足」、「年上の人への言葉づかいは

敬語が当然」、「結婚式の仲人は二人をよく知る人」、「生活充実手段は健康」、「人間関係に満足」など変化を好まない日本人の気質が伺われます。

(3) 日本と天皇に関する項目

日本に対する愛着では「日本に生まれて良かった」が90%以上、「日本の古い寺や民家に親しみをもち」が80%後半を維持しています。

天皇に関する感情は1988年の「無感情」が47%でしたが2013年には28%と低下し、「尊敬と好感」が約10%上昇し、「反感」は1%2%で推移しています。

日本への愛着や天皇への感情は、自然な意識の共有が窺われます。

2 個人の意見と国民全体での分布の関係について

(1) 個人々は意見を変えても、国民全体での分布が変わらない

個人々は年齢を重ねること（加齢）によって意見を変えても、各年齢の構成比が変わらなければ、国民全体での意見分布は変わらない。

(2) 個人々は意見を変えなくても、国民全体での分布が変わる

若い世代ほど支持する人が多いなど、世代間で差があれば、個人々は

意見を変えなくても、世代交代により国民全体での意見分布は変化する。

(3) 個々人は意見を变え、国民全体の分布も変わる。

それ以外に社会状況や経済状況の変化など、時代の動きによっても個々人の意見が変わることがある。この場合、国民全体での意見分布も変わることが多い。

3 理想の家庭像について

人々が理想とする家庭像は1980年代と1990年代に変化が見られ、その後はあまり大きな変化はありませんでした。

調査では次の四つの中から理想と思うもののひとつを選んでもらっています。

(1) 父親は一家の主人としての威厳を保ち、母は父親を盛りたてて、心から尽くしている「夫唱婦随型」

(2) 父親も母親も、自分の仕事や趣味を持っていて、それぞれ熱心に打ちこんでいる「夫婦自立型」

(3) 父親は仕事に力を注ぎ、母親は任された家庭をしっかり守っている「性役割分担型」

(4) 父親は何かと家庭のことに気を使い、母親は温かな家庭作りに専念

している「家庭内協力型」

今から40年前は「性役割分担」を理想とする夫婦が約40%と最も多かったのが、1980年代から2000年代前半まで減り続け、現在では15%しかありません。

この現象の側面は、日本経済が飛躍的に成長を遂げた1954年12月から1973年11月まで続いた高度経済成長期の豊かさが実感できる社会を体感した世代であり、戦後生まれの人が国民の過半数を占め、海外旅行ブーム、輸出の花形である自動車生産台数が世界一となった反面、湾岸戦争、地下鉄サリン事件、イラク戦争、そしてリーマンショックという世界の不安を国民が経験し、それまで家庭を守ってきた主婦も、こ

れらの不安状況の対応から仕事に就くようになったことが考えられます。

また、それを裏付けるように、結婚した女性が職業を持ち続けるべきかを調査した結果、結婚して子供が生まれても、できるだけ職業を続けたいという女性は40年前では20%と少なかつたのが、56%と大幅に増え、家庭に専念するほうが良いという人は35%から15%に減少しま

した。

これらは男女の性別による役割分担について柔軟に考えるようになったことと、男性の給与水準が上らず夫婦ともに働く指向になったことを表すものと思われます。これに伴い自衛隊にも女性隊員が増え防衛も男性だけのものでなくなりつつあります。

そんな時代を生きた若者は、豊かさを求めて都市部へ集まりやがて結婚してマイホームを手に入れました。そして、都市一極集中現象の落とし子となったのが、令和4年4月1日に総務省が発表した全国885の市町村が抱える人口減少と財務力低下が原因となる地方の過疎化問題です。

4 人間関係について

筆者は、昭和24年生まれの団塊人間ですが、子供の遊び仲間との関係においては先輩がいて、同級生がいて、そして後輩が混在し上下左右の人間関係が学べました。

また、親戚関係においても3世代同居が多く、ことある度に親族が集まり家長を中心としたお付き合いが当たり前となっていました。

お付き合いが望ましいか、との問いに対し40年前は「一応の礼儀を尽くす程度の付き合い」が8.4%であったのが、現在は25%まで増加し、「何かにつけて、親族とは相談し助け合えるような付き合いをする」は51.2%から32%と減少し、それに核家族化の蔓延が追い打ちをかけて親族とのお付き合いが希薄になってしまいました。

核家族化の原因の一つとして考えられるのが、父親のあり方で「子供を信頼して干渉しない」は15%から23%に増加し、老後の生き方で「子供や孫と一緒に、和やかに暮らす」が37.9%から26.3%に減少し「夫婦二人で睦まじく暮らす」が10%から20.4%に増加していることも見逃せません。

また、職場や隣近所との人間関係においても「相談や助け合う」がどの場面でも20%ほど減少し、人間関係は最小限で良いとする意識の変化が窺われます。これは部隊における人間関係にも影響し指揮・統率のやり方も変化していくでしょう。

代わりに
このように、日本人の意識は、世

界の大きな流れの中で加齢要因、世
代要因及び時代要因によつて変化を
続けています。

日本は海を隔て大陸と程よい距離
を保ち国土に国境線が存在しないこ
とから他国の脅威を肌で感じること
が少なく、単一民族で成り立ち他国
にはない独自の意識を有していま
す。日本人が持つ独自の意識は、「人
は正直に生きる」、「人には迷惑をか
けない」、「和を大切にする」として
いることから、「あの人は目が澄ん
でいるから心も澄んでいる」、「あの
人は手が温かいから心も温かい」、
「話せば解つてくれる」として簡単
に人を信用してしまいます。

日本人にしか通用しない意識を防
衛に持ち込むと、「世界には正直で、
他国に迷惑をかけず和を大切にす
る国家ばかりで日本が攻撃されること
はない、もし攻撃を受けても話せば
解つてくれる」となります。

このような日本人独自の意識があ
るからこそ、日本の防衛について国
会や政府が憲法の矛盾やマスコミの
偏向報道の是正を正面からとりあ
げ、議論されることが望まれます。